外国語におけるLL

－LLにおけるListening 練習－

川　尻　武　信

1　はじめに

Julian Dakin は、最近出版された The Language Laboratory and Language Learning の中で、language laboratory（以下LLと略す）は、今までおもに話す手段として使用されてきていて、listening device としての LL の価値が軽視されてきていると述べている。（① P 32）

そこで、本論では、音声重視をうちだした audiolingual method および、この method にもとづく音声教材の問題点に焦点をあて、彼の喚起する点に少しでも答えてみたい。

2　Audiolingual method における音声指導

伝統的な grammar translation method から audiolingual method に変わることにより、音声指導上、次のような変化が生じた。

言語は speech であり、言語の本質は音であるという言語観を基盤にするaudiolingual method は、伝統的な訳読式教授法で軽視されていた音声訓練を重視するようになった。かくして、音声面の技能（聞き・話す）練習は、読み書きの練習の前に必ずおこなわれることになった。

また、audiolingual method では、学習者が、言語の patternを自動化するぐらいに反復練習することを、言語学習であると考えたから、教材の内容は、説明中心から練習中心になった。学習コースには、段階ごとに、細かい目標が設定されて、練習は易から難へ小さな段階でなされるようになった。それに、反復練習を徹底させるため、LLを考案し、活用した。

以上のように、audiolingual method は、新しい言語観により、音声訓練の重視、教材の系統化、段階化をすすめた。

さて、E. M. Stack は、この audiolingual method に、次のような評価をあたえている。

> The traditional methods were (and are) effective in teaching the graphic skills of reading, writing and translating. .... The audiolingual method, including the intensive practice provided by the laboratory, has been successful in imparting the speaking and hearing㊟ skills.
>
> （② preface P.P vi－vii）

上述のごとく、audiolingual method は、伝統的教授法が軽視していた音声を重視し、その技能養成において、成果をあげた。しかし、この成果は、伝統的教授法と対比したとき、ひときは光るものであって、十分満足のいくものではない。このことは、かなり音声練習をした人が、渡航直後、話す力と同様聞く力のなさを痛感するという一例をあげれば十分であろう。

そこで、次項では、audiolingual method における音声指導の中の listening 指導の問題点をさぐってみよう。

㊟ここでは hearing と listening を同じものとして考える。

3　Audiolingual method におけるListening 指導の問題点

フリーズは、listening と speaking との関係を次のように述べている。

But in spite of the fact that these two abilities (=listening and speaking) are so closely interwoven, from the point of view of teaching and of learning in the early stages, they constitute two distinct even if complementary aspects of language control, and it has proved helpful to consider them separately.

(③、 P 8)

彼は、初期段階における教授および学習の見地から、 listening と speaking を別々に考えるほうがよいと述べている。このことは、 listening が、いつでも speaking に依存することなく独立しうるものとしてとらえなければならないことからも言える。

ところが、実際の教授では、聞き・話す指導という言葉が示すように両者を区別せずに1つにまとめて考える場合が多い。 Speaking の教授に重点がおかれすぎ、 listening は speaking の付加物と考えられる場合もある。

ところで、 audiolingual method では、学習段階ごとに細かく学習目標を設定することはすでに述べたが、聞く力は、次のように区分された。

聞く力
- 判聴力 (aural perception) を養う
  - 分節音素の弁別
  - かぶせ音素の弁別
- 聴解力 (aural comprehension) を養う
  - 語い (慣用句などを含む)
  - 文法
  - 内容

(⑤、 P 121)

この結果、学習者に何度も漠然と教材を聞かすのではなく、目標をもたせながら体系的なlistening 練習をおこなえるようになっている。

しかし、聞く力は、表の要素だけでは説明できない。 W. M. Riversが述べているように、音、強勢、イントネーションなどの識別は、複雑な機構をもつ聞く力の要素のうちほんのわずかでしかないのである。(④、 P 136)

つづけて、彼女は、いままでの練習は"code"(表で区分した聞く力の要素) を学習者に認識させることだけに集中して"message"の選択という過程に対しての練習があまりなされていないと説いている。(④、 P 156)

audiolingual method の listening drill の問題として次にあげるのは、音声教材のスピードの問題である。 E. M. Stackは、この点に関して次のように述べている。

Experience has shown that beginning drills must be spoken more slowly and distinctly if the student is to hear and produce every sound and intonation accurately.

(②、 P 140)

彼は、初期段階の学習者には、ゆっくりした速度の教材がよいと説くが、 W. M. Riversのように、はじめから発音における普通の速さで聞きとりをおこなうべきであると主張する者もある。外国語を聞きとるさい、speedが少し速くなるだけで聞きとりは大変困難になるから、基本的には、最初から、発音における普通のスピードで聞きとらせるべきであろう。そして、 audiolingual method の教材によくみられるようなスピードを遅くしてあるものは、初級段階の学習者とspeak-

ing 練習の学習者に対して使用すべきであろう。

発話の速さと同様、外国語を聞くときの状況は、聞きとりに大きな影響をおよぼすが、従来の音声教材は、聞くときの状況を考慮に入れず、音声だけを録音している。あるとき、往来のはげしい場所で相手の話を聞くときがあるかもしれない。また、あるとき、大講義室の後方で講義を聞かなければならないかもしれない。

以上、listening指導の位置づけ、従来の教材の問題点をあげ、 audiolingual methodにおける listening 指導の問題を述べた。

4 Listening 練習としてのLL

第2項でのべたように、audiolingual methodは、音声重視を科学的に説き、音声指導法を具体的に示した。そして、その指導の中で、LLを活用した。

LL は、同一の教材を何度もくり返すことができるので pattern の反復練習に好都合であった。そのほかの利点として、色々なネィティブスピーカーの声をよい音質で提供できることや、音声面の評価を容易にすることができること等があり、LLは、音声指導に欠かせないものになっている。

勿論、第3項で述べた教材の問題点は、LLを使用した音声指導にもあてはまる。この状態を C. Sandersは、次のように述べている。

> Even in places where a lot of attention is paid to oral work, there still remains an amazing gap between students' comprehension ability in the classroom/lab and in live situations.
>
> (⑥、P 21)

それでは、このギャップをうめるにはどうしたらいいのだろうか。根本的な解決法は、聞く力の実体の解明である。そうすれば listening 練習は、むだがなく効果的な練習になり、そのギャップの原因も明らかになろう。

しかし、現実には、その解答を完全な形でえられそうにない。だから、現在のところ、教室と実際のコミュニケーション場面とにおける聞く力のギャップの種類や程度を明らかにし、そのギャップをうめていくよりほかはあるまい。

教材の上から言えば、いま以上に色々な種類の教材を作成しなければならないことになる。具体的には、C. Sanders が述べているように、種々なスピード、種々な社会的地位の人々の発話、種々な社会的および地域的アクセント、それに発話を聞くさいの種々な音響状態等を教材にもりこむことになる。(⑥、P 23) ただし、提示する時期は十分注意しなければならない。このような教材は、学習者の発音体系に影響が少なくなる段階に与えなければならない。

LLは、 audiolingual methodでの pattern の反復練習で、よくその機能を発揮したが、今後は、教室と実際場面の聞く力のギャップをうめる役割をはたさなければならない。VTRやスライド等他の視聴覚器械の助けをかりて実際の場面に近づける等この点の努力はなされているが、問題はこれからといった観が強い。

おわりに

最近、海外で生活する人達が、増加している。外国語によるコミュニケーションの必要性は、今後ますますとかれることであろう。それと同時に、 speakingだけでなく listening の力をのばすことにより一層関心がむけられていくことであろう。

今後、LLでの練習は、従来のようにpatternを反復練習することでおわらずに、外国語でコミュ

ニケーションを可能ならしめることを目差さなければならない。そして listening の練習は、speaking 練習以上に重要視していかねばならないだろう。

あわせて、諸科学により、聞いて理解するという複雑な過程を一層明らかにしていかなければならない。

<引用および参考文献>

1. Julian Dakin, The Language Laboratory and Language Learning. Longman, 1973, p. 32.
2. Edward M. Stack, The Language Laboratory and Modern Language Teaching. Oxford University Press, 1961.
3. Charles C. Fries, Teaching and Learning English as a Foreign Language. The University of Michigan Press, 1945, p. 8.
4. Wilga M. Rivers, Teaching Foreign-Language Skills. The University of Chicago Press, 1968.
5. 金田　正也編、「講座・英語教育工学」第3巻、研究社、1972. P 121
6. Carol Sanders, "The Language Laboratory: Too Much of a Good Thing?" Audio-Visual Language Journal, 11, 1, Spring, 1973.